しんわ

No.155
秋季号
2026年

ＩＨＩ
播磨病院



＊訪問診療の現状と今後について

＊第76回日本病院学会に参加して

＊新人紹介



訪問診療の現状と今後について

在宅支援センター　センター長　**藏貫　勝志**

訪問診療のこれまでと今後について自身の経験を交えて述べさせていただきます。

平成２年（1990年）に医師となった私は卒後２～３年目の頃に赴任していた市中病院の訪問診療を経験したこともありました。当時はペーペーの右も左もわからないような若造でしたがベテランの看護師さんに連れられて自宅で脳梗塞の御主人の介護をしているお宅を訪問したことがあります。居間のベッドには気管切開チューブ（前頚部から直接気管に留置した管）を留置された患者さんとその傍らで上手に痰を吸引していた奥さん。その様子は今も鮮明に覚えています。自宅ではそんな医療行為はできないだろうと勝手に思い込んでいたので特に印象に残ったのだと思います。今では長期療養できる施設に入所されるケースかなと思われますが。その後は外科医として外来、手術に忙しくしていたため訪問診療からは遠ざかっていました。

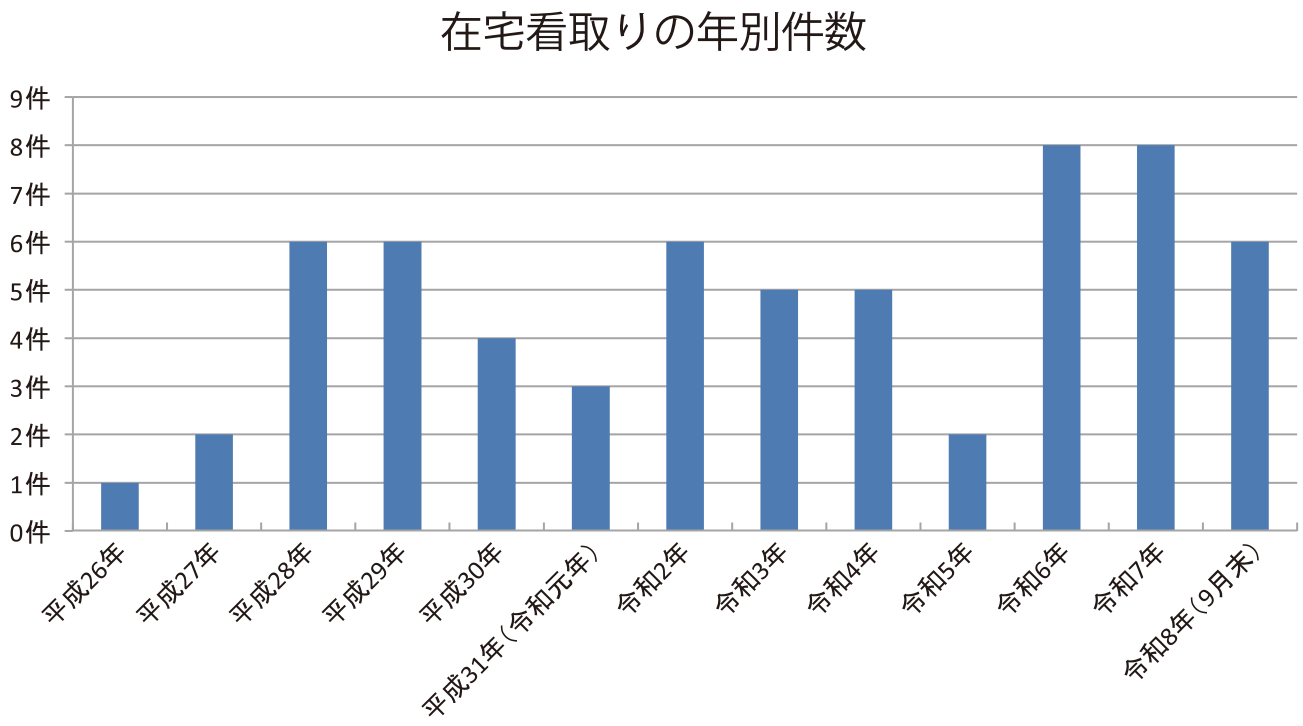
時は流れて平成26年（2014年）に訪問看護ステーションプラムが設立されました。在宅での療養やリハビリをサポートするシステムの構築が始まりました。当院をはじめ近郊の病院やクリニックからの依頼を受け訪問看護、訪問リハビリ、訪問診療を展開しています。初代所長の日笠さんから土井さん、濱田さん、光岡さん、國本さんへと引き継がれました。当院在宅支援センターは平成29年１月に外科の師匠でもある楠本医師から引き継がせていただきました。私はもともと外科を専門としていたこともあり訪問診療の対象になるのはがんの終末期に自宅で療養を希望される方が中心となっていきました。そういう経緯もあり現在も在宅で看取りをさせていただくケースが多いです。別のグラフのごとく少ないながらも徐々に在宅看取り件数も増えてきています。令和３年から５年にかけてはコロナウイルス感染症の蔓延と私の体調不良が重なって一時件数が減ったものと推

測されます。相生市内を中心に遠方ではたつの市内や赤穂市内での看取り症例もありました。また高齢の御夫婦を在宅にて数年の時間差でお看取りさせていただいたこともあります。

本人が在宅での療養を希望され、家族の方もその希望をかなえてあげたいと望まれ在宅看取りの受け入れが可能であれば在宅看取りも可能と思います。ただ家族にとってあまりにも精神的肉体的負担が大きいようであれば在宅療養後、最期は入院での看取りも可能です。いずれにせよ本人と家族にとって後悔のない最期を迎えることのサポートをすることができれば理想的だと思っています。

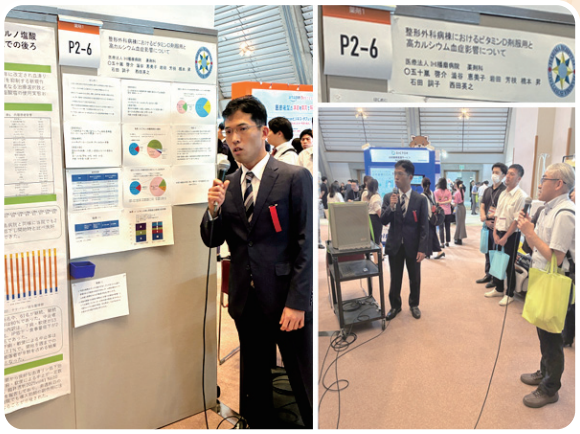
少子高齢化が急速に進む昨今、今後も在宅での療養や看取りのニーズも増えてくるかと予想されます。今後もそのニーズにできる範囲でお応えできれば幸いです。

今後ともご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



「第76回 日本病院学会」に参加して

薬剤科　五十嵐　啓介



2026年7月2日から7月3日にかけて京都で行われた「第76回　日本病院学会」に参加させて頂きました。夏の「京都」といえば「猛暑」のイメージしか無かったので炎天下の移動を予想しておりましたが、幸いにも今年は梅雨明けの初夏の暑さであったので助かりました。

新幹線・地下鉄京都線を使って2時間。会場に到着した時の印象は今まで参加した学会とは異なり「病院学会」というだけのことはあり会場の広さ、参加者人数の多さには驚かされました。到着後は播磨病院職員と合流し記念撮影を行った後、関心のある講演を拝聴致しました。私は7月2日にポスター発表させて頂きました。発表に関心を持ち聴講して下さる方も居れば、中には発表前より写真撮影をされる方など様々でした。



大きなテーマ発表ではありませんでしたが、日頃の業務の中の些細なことの積み重ねが医療の発展に繋がることを感じました。発表終了の夜は学会イベント「平安神宮特別拝観」に参加することで普段の喧騒とは離れた自然の中で身も心も洗うことができました。

今回この様な機会を頂けたことに御礼申し上げます。医療業界だけでなく他業界の話なども聴講でき大変勉強になりました。

最後に私の頭に残った講演の一部を紹介させて頂きます。

・日本病院会会長　相澤　孝夫　先生
「医療界のAIは（artificial intelligence：人工知能）ではなく（augmented intelligence：拡張知能）であり常に人が関与する『human in the loop』を原則としAI単独で終わらせてはいけない」

・諏訪中央病院　名誉院長兼作家　鎌田　實　先生
「医療業界は厳しく、地方では医療職離れも進んでいる。
だからこそ今一度『つながり』を大切に『優しく・明るく・あたたかい』病院を維持することで医療従事者が働きたいと思える環境を作ることが大切だ」



第76回　日本病院学会に参加して

リハビリテーション科　清水康平・小佐見直也



7/2～ 7/3に行われた第76回日本病院学会に参加してきました。

京都開催と近場だったため当日新幹線で現地入りし国立京都国際会館へ向かいました。エントリーを済ませ発表会場を下見すると、立ち見の方もいて300～400人はいそうな盛況ぶりでした。気になる演題を聴講し、薬剤科の五十嵐さんの応援にもいきました。緊張が伝わってきましたが質問にも答えることが出来ていました。

私の出番は最終グループの最終演題だったため権太路という蕎麦屋さんで昼食を済ませ（美味しい）出番に備えました。盛況していた会場でしたが、自分の出番が終わると帰る人が多く閑散としていました。30人程となった会場で「靴と足のサイズの適合性の実態調査」の演題を発表しました。緊張しましたが何とか発表を終えました。座長から想定外の質問をされ上手く答えることができませんでしたが、整形外科のDrからは良い発表だったとお褒めの言葉を頂けました。発表後は平安神宮特別拝観（医療人の集い）にも参加し、清水寺の参拝も行くことが出来ました。



今回の学会に参加しとても良い経験が積めました。この経験を今後の仕事に活かしていきたいです。





